

II 平成29年の病害虫の発生状況

1 病害虫の発生経過概要及び発生原因解析

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
早期水稻	葉いもち	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：並	・6月5半旬から発生を認め、全般にやや多の発生で推移した。	・6月中下旬の寡日照と多雨。	・プロベナゾール剤、ピロキロン剤等の箱施用による防除
	穂いもち	平年：並 前年：並	平年：少 前年：少	・8月2半旬から発生を認め、発生量は少なかった。	・梅雨明け以降の高温、少雨。	・出穂期頃のフェリムゾン・フサライド剤、カスガマイシン・フサライド剤等による本田防除
	縞葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：並	・巡回調査では発生を認めなかった。	・ヒメトビウンカのRSV保毒率が低かった(RSV保毒虫率：0.4%)。・本田におけるヒメトビウンカの発生が並であった。	・ピメトロジン剤等の箱施用による防除 ・エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤、ジノテフラン剤等による本田防除
	ヒメトビウンカ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・5月6半旬から発生を認め、平年並の発生であった。		・ピメトロジン剤等の箱施用による防除 ・エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤、ジノテフラン剤等による本田防除
	萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生を認めなかった。	・ツマグロヨコバイのRDV保毒虫率が低かった(RDV保毒虫率：0%)。	
	ツマグロヨコバイ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・本田では5月6半旬から発生を認め、平年並の発生で推移した。		・エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤、ジノテフラン剤等による本田防除
	紋枯病	平年：並 前年：並	平年：少 前年：少	・7月2半旬から発生を認め、平年より少ない発生であった。	・7月下旬から8月の高温少雨。 ・近年、発生は減少傾向である。	・バリダマイシン剤、フルトラニル剤、ベンシクロン剤による本田防除
	セジロウンカ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや少	・5月3日にネットトラップ(諫早市)で初確認し、平年より早い飛来であった。6月4～6半旬と7月3～4半旬にかけて平年並の飛来があった。 ・本田では6月3半旬から発生を認め、平年並で推移した。		・エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤、ジノテフラン剤等による本田防除
	トビロウンカ	平年：遅 前年：並	平年：並 前年：やや多	・主要な飛来波は7月13日で、飛来量は平年並であった。 ・7月2半旬から圃場での発生を確認した。その後、発生圃場率、株当たり虫数ともに平年並に推移した。		・エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤、ジノテフラン剤等による本田防除
	コブノメイガ	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：やや少	・6月9日にフェロモントラップ(諫早市)で初誘殺を確認した。飛来は、6月5半旬、6半旬に見られ、飛来量は平年並であった。 ・7月2半旬から食害の発生を認め、その後、発生圃場率、食害株率ともに平年よりやや少なく推移した。		・カルタップ剤、テブフェノジド剤等による本田防除
	イネクロカメムシ	平年：やや早 前年：やや早	平年：やや多 前年：多	・5月5半旬から発生を認め、やや多の発生で推移した。	・東北地域での発生が多くなっている。	・エトフェンブロックス剤等による防除
	イネミズゾウムシ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・5月2半旬から発生を認め、平年並の発生で推移した。		・ベンフラカルブ剤等の箱施用による防除
	斑点米カメムシ類	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	・本田ではやや多の発生であった。	・6月～7月上旬の雑草地における調査では、平年並の発生であったが、梅雨明け後の高温少雨により、7月下旬から8月下旬はやや多の発生であった。	・圃場周辺の雑草除去 ・出穂期以降のエトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤、ジノテフラン剤、エチプロール剤等による防除
普通期水稻	葉いもち	平年：やや早 前年：やや早	平年：やや多 前年：やや多	・6月6半旬から発生を認め、8月に増加しやや多い発生となった。	・6月下旬～7月上旬の寡日照および多雨。	・トリシクラゾール剤、プロベナゾール剤等の箱施用による防除
	穂いもち	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：やや少	・9月2半旬から発生を認め、平年よりやや少ない発生であった。	・8月下旬の日照が多かった。	・出穂期頃のフェリムゾン・フサライド剤等による本田防除
	縞葉枯病	平年：遅 前年：早	平年：少 前年：並	・8月2半旬から発生を認め、平年より少ない発生であった。	・ヒメトビウンカ第1世代のRSV保毒率が低かった(RSV保毒虫率：0.1%)。・耕種的防除の徹底(水田耕耘など)	・ピメトロジン剤等の箱施用による防除 ・BPMC剤、エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除
	ヒメトビウンカ	平年：やや早 前年：やや早	平年：並 前年：並	・6月2半旬から発生を認め、一時的に多かったがその後は低下して推移し、平年並の発生であった。		・ピメトロジン剤等の箱施用による防除 ・BPMC剤、エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除
	萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生を認めなかった。	・ツマグロヨコバイのRDV保毒虫率が低かった(RDV保毒虫率：0%)	

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
普通期水稻	ツマグロヨコバイ	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	・本田では6月2半旬から発生を認め、一時的に多かったがその後減少し、平年並の発生で推移した。		・ピメトロジン剤等の箱施用による防除 ・BPMC剤、エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除
	紋枯病	平年:やや遅 前年:やや早	平年:やや多 前年:やや多	・8月1半旬から発生を認め、9月に増加し平年よりやや多い発生であった。	・7月から8月上旬の高温 ・差数が多かった。	・フルトラニル剤、ペンシクロン剤、バリダシン剤等による本田防除
	セジロウンカ	平年:並 前年:並	平年:少 前年:やや少	・5月25日にネットトラップ(諫早市)で初確認し、飛来時期としては平年並であった。6月2半旬及び6月4～6半旬、7月2～3半旬にかけて飛来し、飛来量は平年より少なかった。 ・本田では6月6半旬から発生を認め、平年より少なくて推移した。	・飛来量が平年より少なかった。箱剤の残効がある時期であり圃場での発生は少なかった。	・ピメトロジン剤等の箱施用による防除 ・BPMC剤、プロプロフェンジン剤、エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤、ジノテフラン剤等による本田防除
	トビイロウンカ	平年:やや遅 前年:やや遅	平年:多 前年:多	・7月5～12日に主飛来を認め、飛来量は平年並であった。 ・7月2半旬から、巡回調査において圃場での発生を確認した。その後、8月下旬までは発生圃場率、株当たり虫数ともに平年並で推移したが、9月上旬以降、発生圃場率は高くなった。 ・短翅雌成虫は8月上旬から認め、主要飛来の第二世代成虫の発生時期である9月上旬には短翅雌成虫の発生が多く見られた。9月下旬以降は主要飛来波の第三世代幼虫が発生し、虫数が急増した。	・「にこまる」等、収穫の遅い品種で被害が多かった。	・ピメトロジン剤等の箱施用による防除 ・BPMC剤、プロプロフェンジン剤、エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤、ジノテフラン剤、エチプロロール剤等による本田防除
	コブノメイガ	平年:並 前年:並	平年:少 前年:並	・6月21日にフェロモントラップ(諫早市)で初誘殺を確認し、平年より遅かった。飛来は6月6半旬にピークとなり、それ以降は平年並で推移した。 ・普通期水稻では、7月6半旬から食害の発生を認め、その後、発生圃場率、食害株率および10㎡あたり成虫数は平年より少なくて推移した。	・長期残効箱剤の普及	・クロラントラニリプロール剤の箱施用による防除 ・テフフェノジド剤、カルタップ剤等による本田防除
	斑点米カメムシ類	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	・圃場における発生はアサジカスミカメを主体に、平年並の発生であった。	・6月から8月まで雑草地における調査では平年並の発生で推移した。	・圃場周辺の雑草除去 ・出穂期以降のエトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤、ジノテフラン剤、エチプロロール剤等による防除
スクミリンゴガイ	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	・移植直後、降雨により深水や冠水した圃場では被害がみられ、平年並の発生であった。		・メタアルデヒド剤、IBP剤等による本田防除 ・卵塊、貝の捕殺	
麦	赤かび病	大麦:平年:やや遅 前年:やや遅 小麦:平年:並 前年:並	大麦:平年:並 前年:やや少 小麦:平年:並 前年:やや少	・大麦、小麦ともに5月2半旬から発生を認め、大麦・小麦共に平年並の発生であった。	・2月中旬～3月の少雨、多日照	・開花盛期とその7～10日後の薬剤散布(チオファネートメチル、プロピコナゾール、メトコナゾール、テブコナゾール)
	うどんこ病	大麦:平年:一 前年:一 小麦:平年:一 前年:一	大麦:平年:並 前年:少 小麦:平年:少 前年:少	・大麦、小麦のいずれも発生を認めなかった。		
	黒穂病	大麦:平年:一 前年:一 小麦:平年:遅 前年:並	大麦:平年:少 前年:少 小麦:平年:やや少 前年:やや少	・大麦では発生を認めなかった。 ・小麦では5月2半旬から発生を認め、平年よりやや少ない発生であった。		・種子消毒(トリフルミゾール、ベノミル等)
	斑葉病	大麦:平年:一 前年:一	大麦:平年:少 前年:並	・発生を認めなかった。	・種子消毒の普及により近年減少傾向にある。	・種子消毒(トリフルミゾール、ベノミル等)
	アブラムシ類	大麦:平年:並 前年:並 小麦:平年:並 前年:並	大麦:平年:並 前年:並 小麦:平年:並 前年:並	・大麦では3月6半旬から発生を認め、平年並の発生であった。 ・小麦では3月2半旬から発生を認め、平年並の発生であった。		
	大豆	べと病	平年:早 前年:早	平年:並 前年:やや少	・8月2半旬から発生を認め、平年並の発生である。	
葉焼病		平年:並 前年:やや遅	平年:やや多 前年:やや多	・8月6半旬から発生を認め、平年よりやや多い発生である。	・9月中下旬の多雨	
ハスモンヨトウ		平年:並 前年:並	平年:やや少 前年:やや少	・7月5半旬から白変葉が見られたが、平年よりやや少ない発生である。 ・フェロモントラップ(諫早市)の誘殺数は平年よりやや少なくて推移している。		・クロラントラニリプロール剤、エトフェンブロックス剤等による防除
鱗翅目幼虫		平年:並 前年:やや早	平年:並 前年:並	・8月6半旬からウワバ類の発生を認め、平年並の発生で推移している。		・ハスモンヨトウとの同時防除
吸蜜性カメムシ		平年:並 前年:並	平年:やや少 前年:やや少	・8月2半旬から発生を認め、9月上旬にやや多くなったが、その後平年よりやや少なくて推移している。		・エトフェンブロックス剤、ジノテフラン剤による防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
ばれいしよ (秋作は16 年植付)	葉巻病	秋作 平年:並 前年:やや遅 春作 平年:遅 前年:並	秋作 平年:やや多 前年:やや多 春作 平年:多 前年:多	・秋作:11月上旬に発生を認め、その後発生はほとんど認めなかった。 ・春作:5月上旬まで発生は見られなかったが、下旬に増加した。	・3月上旬から収穫までの期間、アブラムシの発生が多かった。	
	モザイク病	秋作 平年:一 前年:一 春作 平年:並 前年:早	秋作 平年:少 前年:少 春作 平年:やや多 前年:多	・秋作:発生をほとんど認めなかった。 ・春作:5月上旬まで発生は見られなかったが、下旬に増加した。	・3月上旬から収穫までの期間、アブラムシの発生が多かった。	
	疫病	秋作 平年:並 前年:並 春作 平年:一 前年:一	秋作 平年:並 前年:少 春作 平年:やや少 前年:少	・秋作:11月下旬に発生を認め、その後平年並の発生で推移した。 ・春作:ほとんど発生を認めなかった。	・4月下旬～5月上旬の降水量が少なかった。	
	アブラムシ類	秋作 平年:並 前年:並 春作 平年:並 前年:並	秋作 平年:やや少 前年:やや少 春作 平年:多 前年:やや多	・秋作:9月下旬から発生を認め、その後やや少ない発生で推移した。 ・春作:3月下旬から発生を認め、その後やや多い発生で推移した。	・暖冬により越冬虫が多かった。	
	ニジュウヤホシテントウ	秋作 平年:一 前年:一 春作 平年:並 前年:やや遅	秋作 平年:少 前年:並 春作 平年:多 前年:多	・秋作:ほとんど発生を認めなかった。 ・春作:4月下旬に発生を認め、やや多い発生であったが、その後は平年並で推移した。	・暖冬により越冬虫が多かった。また出芽期以降の気温も高かった。	
	食葉性ヤカ類 (ハスモンヨウ、シロイ チモンヨウ、オオタバ コカ)	秋作 平年:並 前年:並 春作 平年:一 前年:一	秋作 平年:並 前年:やや多 春作 平年:やや少 前年:やや少	・秋作:9月上旬から発生を認め、10月下旬まではやや多い発生で推移したが、その後は平年並～やや少ない発生で推移した。 ・春作:ほとんど発生を認めなかった。		
冬春きゅうり	モザイク病	平年:一 前年:一	平年:並 前年:並	1月上旬から発生を認め、その後平年並の発生で推移した。	・アブラムシ類の防除	・アブラムシ類の防除
	斑点細菌病	平年:一 前年:一	平年:並 前年:並	・ほとんど発生を認めなかった。		・銅剤による防除
	べと病	平年:遅 前年:遅	平年:並 前年:並	・1月上旬から発生を認め、その後平年並の発生で推移した。		・適正な湿度管理 ・マンゼブ、ベンチアバリアルブイソプロ ル・TPN、シアゾファミド、シメトモルフ、ホセ チル等による防除
	褐斑病	平年:並 前年:早	平年:少 前年:並	・11月上旬から発生を認め、調査期間を通じて少ない発生で推移した。	・耐病性品種の導入	・耐病性品種の作付け ・シエトエンカルブ・チオアネートメチル、ジエ フェンカルブ・プロシトシ等による防除
	うどんこ病	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	・11月上旬から発生を認め、平年並の発生で推移した。		・DMI、フルチアニル、ベンチオピラド、オキシア クリレート系、TPN、炭酸水素カリウム、メバ コピリム剤等による防除
	灰色かび病	平年:一 前年:一	平年:やや少 前年:並	・ほとんど発生を認めなかった。		・適正な湿度管理 ・被害果の除去 ・シエトエンカルブ、プロシトシ、メバコピリム、 フルジオキソニル、ベンチオピラド剤等による 防除
	菌核病	平年:一 前年:一	平年:並 前年:並	・ほとんど発生を認めなかった。		・湿度管理 ・被害果の除去 ・灰色かび病との同時防除
	アブラムシ類	平年:一 前年:一	平年:並 前年:やや少	・ほとんど発生を認めなかった。		・定植時のネオニコチノイド系殺虫剤による 防除 ・コナシラミ類、アザミウマ類との同時防除
	ミナミキアザミウマ	平年:やや遅 前年:やや遅	平年:やや多 前年:並	・11月上旬から発生を認め、その後平年よりやや多の発生で推移した。		・定植時のネオニコチノイド系殺虫剤による 防除 ・エマクタン安息香酸塩、スピノサド、ネオ ニコチノイド系殺虫剤等による防除 ・作付け終了後の施設内の蒸し込み ・スワルスキーカブリダニによる防除
	コナシラミ類	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	・11月上旬から発生を認め、2月上旬にやや多い発生となったがその後平年並で推移した。		・定植時のネオニコチノイド系殺虫剤による 防除 ・ネオニコチノイド系、トルフェンタト剤等 による防除 ・防虫ネットによる侵入防止 ・作付け終了後の施設内の蒸し込み

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
冬春トマト	モザイク病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	・ほとんど発生を認めなかった。	・アブラムシ類の防除	・発病株の早期抜取り ・アブラムシ類の防除
	黄化葉巻病	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：やや多	・1月上旬に発生を認め、平年よりやや少ない発生で推移した。	・発病株の抜き取りやコナジラミ類の防除が徹底された。	・コナジラミ類の防除 ・発病株の早期抜き取り
	疫病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：少	・ほとんど発生を認めなかった。		・ベンチアバリカルブ、TPN、シメキサル、シアゾファミド、マンジプロバト剤等による防除
	葉かび病	平年：やや早 前年：やや早	平年：やや多 前年：並	・12月上旬に発生を認め、その後平年よりやや多い発生で推移した。		・トリフルゾール、ベンチオピラド、TPN剤等による防除 ・抵抗性品種の作付け
	灰色かび病	平年：遅 前年：やや遅	平年：やや少 前年：やや少	・3月下旬に発生を認め、その後やや少ない発生で推移した。		・フロシドン、ジエトフェカルブ、ベンチオピラド、フルシオキシル、ホスカード剤等による防除 ・くん煙剤の利用 ・発病果・葉の除去と適正換気
	アブラムシ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・4月上旬に発生を認め、一部圃場で多発したが、その後発生は見られなかった。		・コナジラミ類との同時防除
	ハモグリハエ類	平年：遅 前年：早	平年：やや少 前年：並	・12月上旬に発生を認め、その後少ない発生で推移した。		・エマクチン安息香酸塩、シロミン、ネオコチノイド系剤等による防除
	タバコ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	・ほとんど発生を認めなかった。		・クロラントリニプロール、ピリダリル、スピネトラム、エマクチン安息香酸塩、スピノサド、IGR剤等による防除
	コナジラミ類	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	・11月に発生を認め、1月まで平年並で推移したがその後平年よりやや多い発生で推移した。	・薬剤防除と施設内侵入防止対策の徹底	・防虫ネット及び黄色粘着板の設置 ・定植時のネオコチノイド系粒剤施用 ・ピリダベン、スピロメフェン、ピリルキナゾン、ネオコチノイド系剤等による防除 ・作付け終了後の施設内の蒸し込み
いちご(本圃16年植付)	炭疽病	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	・定植後から発生が見られ、年内は平年より高く推移したが、その後の発生は平年並で推移した。	・育苗圃からの持込 ・10～12月にかけての高温	・健全株の選別の徹底 ・発病株の早期除去
	萎黄病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：－	・巡回調査においてはほとんど発生を認めなかった。		・健全株の選別の徹底 ・発病株の早期除去 ・ダゾメット剤、クオルピクリン剤等による土壌消毒
	うどんこ病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：やや少	・巡回調査においてはほとんど発生を認めなかった。	・うどんこ病に対する耐性がやや高い品種「ゆめのか」の作付け増加	・古葉、罹病葉の除去 ・被害果の除去 ・DMI、ベンチオピラド、炭酸水素カリウム、ポリオキシン、メバニピリウム剤等の散布及び硫黄くん煙剤による防除
	灰色かび病	平年：やや早 前年：やや早	平年：多 前年：並	・11月上旬に発生を認め、12月下旬から1月上旬にかけて急増した。その後は平年並で推移したが、4月上旬から増加し4月下旬には平年より多くなった。	・12月下旬から1月上旬の高温多雨 ・灰色かび病が発生しやすい品種「ゆめのか」の作付け増加	・湿度管理 被害果の除去 ・ベンチオピラド、イプロジオン、フロシドン、メパニピリウム、、Qoi剤等による防除
	アブラムシ類	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	・9月下旬に発生を認め、その後やや多い発生で推移した。	・11月中旬から1月上旬にかけての高温	・ピメトロジン、フロニカミド、アセタミプリド剤等による防除
	ハダニ類	平年：やや遅 前年：やや遅	平年：多 前年：やや多	・10月下旬に発生を認め、11月下旬までは平年よりやや少ない発生であったが、12月上旬以降発生が増加し、1月上旬から4月下旬まで平年より多い発生で推移した。	・育苗圃からの持込 ・11月中旬から1月上旬にかけての高温 ・薬剤感受性の低下	・シフルメトフェン、シエノピラフェン、ミルベメクチン、、エマクチン安息香酸塩、気門封鎖剤等による防除 ・天敵による防除
	ハスモンヨトウ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・定植後から発生を認め、平年並で推移した。		・クロラントリニプロール、フルベンジアミド、クロルフェナビル、ピリダリル、エマクチン安息香酸塩剤等による防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
いちご(育苗圃17年植付)	炭疽病	平年: やや遅 前年: やや遅	平年: 並 前年: やや少	・7月上旬に発生を認め、8月上旬までやや多で推移したが、その後は平年並の発生となった。		・発病株の除去 ・高設育苗 ・全面マルチ被覆 ・雨よけ育苗 ・親株床の土壤消毒 ・プロピネブ、ジチアノン、有機銅、マンゼブ、フルジオキシソニル等による防除
	萎黄病	平年: - 前年: -	平年: やや少 前年: 並	・巡回調査においてはほとんど発生を認めなかった。		・発病株の除去 ・ダゾメット剤、クロルピクリン剤等による土壤消毒
	うどんこ病	平年: - 前年: -	平年: 少 前年: やや少	・巡回調査においてはほとんど発生を認めなかった。	・うどんこ病に対する耐性がやや高い品種「ゆめのか」の作付け増加	・古葉、罹病葉の除去 ・DMI、ベンチオピラド、炭酸水素カリウム、ポリオキシシ、メバニピリム剤等による防除
	輪斑病	平年: やや遅 前年: やや遅	平年: 並 前年: やや多	・6月上旬に発生を認め、7月下旬に増加した。その後は平年並で推移した。		・被害葉の除去 ・一部の炭疽病及びうどんこ病防除薬剤による同時防除
	アブラムシ類	平年: 並 前年: 並	平年: やや多 前年: やや多	・5月上旬に発生を認め、5月下旬までは平年よりやや多い発生であったが、6月上旬に減少し、その後は平年並で推移した。	・暖冬により越冬虫が多かった。 ・4月上旬から5月上旬の気温が平年より高かった。	・アセタミプリド、フロニカミド等による防除
	ハダニ類	平年: 並 前年: 並	平年: 多 前年: 多	・5月上旬に発生を認め、5月下旬に増加し、6月下旬に発生量がピークとなった。その後、7月上旬に減少したが、9月上旬の定植期まで平年よりやや多～多の発生で推移した。	・前年産本圃からの持込 ・5～6月の降水量が少なかった。 ・薬剤感受性の低下	・ミルベメクチン、クロルフェナピル、エマメクチン安息香酸塩、気門封鎖剤等による防除
	ハスモンヨトウ	平年: 並 前年: 並	平年: やや少 前年: やや少	・6月上旬に発生を認め、7月下旬に増加した。その後は平年並で推移した。		・ピリダリル、クロラントラニプロール、エマメクチン安息香酸塩剤等による防除
たまねぎ(16年植付)	白色疫病	平年: - 前年: -	平年: 少 前年: 少	・ほとんど発生を認めなかった。	・べと病に対する防除圧の上昇。	
	べと病	平年: 並 前年: 並	平年: やや少 前年: 少	・3月上旬から発生を認めたが、その後やや少ない発生で推移した。	・予防的防除と越年罹病株抜取りの徹底。 ・3月の低温・少雨。	・マンゼブ・ベンチアバリカルブイソプロピル剤等による予防的防除の徹底 ・越年罹病株抜取り処分の徹底 ・地域一斉防除の徹底
	ホトリチス属菌による葉枯症	平年: 早 前年: やや早	平年: 少 前年: 少	・11月下旬から1月まで発生が見られたが、その後はほとんど発生を認めなかった。		
	ネギアザミウマ	平年: 並 前年: 並	平年: やや少 前年: やや少	・11月上旬から発生を認めたが、その後やや少ない発生で推移した。		・ペルメトリン・アセタミプリド・スピネトラム剤等による防除
冬レタス	斑点細菌病	平年: やや早 前年: 早	平年: やや多 前年: やや多	・10月下旬にやや多い発生であったが、その後は平年並で推移した。	・10月の高温多雨	・銅、オキシニック酸剤による防除
	腐敗病	平年: やや遅 前年: -	平年: 並 前年: やや多	・12月までは発生が見られなかったが、1月に発生を認めた。		・銅、オキシニック酸剤による防除
	灰色かび病	平年: - 前年: -	平年: 少 前年: 並	・巡回調査においてはほとんど発生を認めなかった。		・イプロジオン、ボスカリド、Qoi剤等による防除
	菌核病	平年: 並 前年: 並	平年: やや少 前年: やや少	・11月下旬に発生を認め、その後やや少ない発生で推移した。		・イプロジオン、ボスカリド、Qoi剤等による防除
	オタハコカ	平年: - 前年: -	平年: 少 前年: 並	・巡回調査においてはほとんど発生を認めなかった。		・クロラントラニプロール、フルベンジアミド、エマメクチン安息香酸塩、ピリダリル剤等による防除
	ハスモンヨトウ	平年: 並 前年: 早	平年: 並 前年: やや多	・10月上旬に発生を認め、平年並で推移した。		・クロラントラニプロール、フルベンジアミド、エマメクチン安息香酸塩、ピリダリル剤等による防除
	アブラムシ類	平年: 遅 前年: やや遅	平年: やや少 前年: やや少	・11月上旬に発生を認め、その後はやや少ない発生で推移した。		・チアメトキサム、ジノテフラン剤等による防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
かんきつ	そうか病	葉 平年:並 前年:やや遅 果実 平年:並 前年:並	葉 平年:やや多 前年:やや少 果実 平年:並 前年:並	・春葉では5月上旬から発生を認め、5月下旬にかけて増加し、平年よりやや多い発生量となった。 ・果実では7月下旬に発生を認め、発生量は平年並であった。	・葉では4月上、中旬の高温多雨が発病を助長した。	・イミベンコナゾール剤、ジチアノン剤等による発芽期の防除 ・クレソキムメチル剤等による灰色かび病との同時防除
	かいよう病	葉 平年:並 前年:並 果実 平年:やや遅 前年:やや遅	葉 平年:並 前年:やや少 果実 平年:やや少 前年:並	・温州みかんの春葉では平年並の5月下旬から発生を認め、平年並の発生量であった。 ・果実では7月下旬に発生を認め、その後、平年並の発生量であった。	・5下旬～6月下旬の少雨	・無機銅剤による防除 ・発病枝葉の除去 ・防風対策の強化
	黒点病	平年:やや遅 前年:やや遅	平年:やや少 前年:少	・7月上旬から発生を認め、9月まで漸増したが平年よりやや少なく推移した。また、前期感染型病斑より後期感染型病斑多かった。	・前期型が少ない要因として5下旬～6月下旬の少雨。後期感染型病斑が増えた要因として、8月中旬～下旬の多雨。	・マンゼブ剤、マンネブ剤による防除
	ミカンハダニ	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	・6月上旬から下旬に平年よりやや多い発生となったが、その後は減少し、8月から9月にかけて平年並の発生量となった。	・5下旬～6月下旬の少雨により増加。	・冬季、夏季のマシン油乳剤による防除 ・8月下旬～9月上旬のシエノピラフェン剤等による防除
	ミカンサビダニ	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	年間を通じ少なく推移した。	・7月、8月の多雨	・ピリダベン剤等による防除、シエノピラフェン・ピリダベン混合剤によるミカンハダニとの同時防除
	チャノキイロアザミウマ	平年:並 前年:早	平年:多 前年:多	・諫早市のトラップでは、平年よりやや早い6月2半旬に第2世代の発生ピークを迎え発生量も多かった。7月上旬から平年並～やや少なく推移した。 ・果実の被害は果梗部が多く7月上旬から増加した。果頂部は平年よりやや少ない発生であった。	・5下旬～6月下旬の少雨により増加。	・クロルフェナビル剤、ネオニコチノイド系剤およびシアントラニプロール剤等による防除 ・光反射シートによる抑制
	カメムシ類	7月以前 平年:並 前年:並 8月以降 平年:並 前年:並	7月以前 平年:並 前年:やや多 8月以降 平年:多 前年:並	・越冬世代のフェロモントラップの誘殺量は8月中旬まで平年並で推移したが、8月下旬から当年世代が発生し、9月中～下旬から10月上旬にかけて増加した。 ・予察灯の誘殺数は8月5半旬、9月4半旬に2回発生ピークが見られ、平年並～多く推移した。 ・7月下旬～9月上旬にかけてヒノキ毬果に生息する虫数は平年より多かった。 ・9～10月はカンキン園へ平年より多い飛来を認めた。	・ヒノキきゅう果の着生量が多かった。 ・8月の高温による生育促進、及び少雨による密度増加 ・9月中旬の台風接近等による離脱促進。	・合成ピレスロイド系剤、ネオニコチノイド系剤による防除 ・注意報により発生状況の伝達および注意喚起を行った
マルカイガラムシ類	平年:並 前年:並	平年:やや多 前年:やや多	・8月下旬までは、平年よりやや少なく推移したが、9月上旬から発生量が増加し、やや多い発生となった。	・5下旬～6月下旬の少雨		
びわ	がんしゅ病	葉 平年:遅 前年:遅	葉 平年:やや少 前年:やや少	・春葉における発生時期は平年並で、発生量は平年よりやや少なく推移した。	・5下旬～6月下旬の少雨	
	灰斑病	平年:やや遅 前年:並	平年:やや多 前年:やや多	・発生は6月上旬から認め平年並で推移したが、9月上旬にやや多い発生となった。	・8、9月の多雨	
	ナシヒメシンクイ	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	・巡回調査では発生を認めなかった。 ・フェロモントラップによる誘殺量は全体的に平年並で推移し、7月は平年より多かった。茂木地区は平年並～やや多く推移した。		
	カメムシ類	平年:並 前年:並	平年:並 前年:やや多	・病害虫防除員の報告では、一部の園に飛来を認めた。 ・越冬世代のフェロモントラップにおける誘殺量は平年並で推移した。	・チャバネアオカメムシの越冬量は平年並であった。	

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
なし	黒星病	平年: やや遅 前年: 並	平年: 多 前年: 多	・発生は5月上旬に初確認し、一部多発圃場も見られ、5月16日付けで注意報を発令した。その後も、発生は期間を通じて平年より多く推移した。	・4月の開花期頃の多雨	・ジフェノナゾール剤、イミタジンアルベシル酸塩剤等による防除
	赤星病	平年: 並 前年: 並	平年: やや多 前年: やや多	・初発は4月下旬で平年並、その後の発生は平年よりやや多く推移した。	・4月の多雨	・DMI剤による防除
	うどんこ病	平年: やや遅 前年: やや早	平年: 並 前年: やや多	・期間を通じて、ほぼ平年並で推移した。		・DMI剤等による防除
	ナシヒメシクイ	平年: 並 前年: 並	平年: 並 前年: 並	・巡回調査では発生を認めなかった。 ・フェロモントラップによる誘殺量は全体的に平年並で推移し、7月は平年より多かった。		・ネオニコチノイド系、合成ピレスロイド系剤による防除
	ハダニ類	平年: 遅 前年: やや遅	平年: 並 前年: 並	・8月上旬に発生を認め、その後は平年並で推移した。		・ミルベクテン剤、エトキサゾール剤等による防除
	カメムシ類	7月以前 平年: 並 前年: 並 8月以降 平年: 並 前年: 並	7月以前 平年: 並 前年: やや多 8月以降 平年: 多 前年: 並	・越冬世代のフェロモントラップの誘殺量は8月中旬まで平年並で推移したが、8月下旬から当年世代が発生し、9月中～下旬から10月上旬にかけて増加した。 ・予察灯の誘殺数は8月5半旬、9月4半旬に2回発生ピークが見られ、平年並～多く推移した。 ・7月下旬～9月上旬にかけてヒノキ毬果に生息する虫数は平年より多かった。	・ヒノキきゅう果の着生量が多かった。 ・8月の高温による生育促進、及び少雨による密度増加 ・9月中旬の台風接近等による離脱促進。	・合成ピレスロイド系剤、ネオニコチノイド系剤等による防除 ・注意報により発生状況の伝達および注意喚起を行った。
	アブラムシ類	平年: 並 前年: 並	平年: やや多 前年: 多	・発生は4月から6月までは平年より多く、7月以降は平年並で推移した。	・3～4月の多飛来 ・5～6月の少雨	・ネオニコチノイド系剤等による防除
ぶどう	黒とう病	平年: 並 前年: 並	平年: 並 前年: やや少	・発生は5月にやや多く、その他の期間はほぼ平年並で推移した。	・4月の多雨	・QoI剤、ジチアノ剤、マンセブ剤等による防除
	べと病	平年: 遅 前年: 遅	平年: 少 前年: 少	・発生時期は平年より遅く7月下旬から認められるようになった。発生量は期間を通じて少なく推移した。	・5～6月の少雨	・アミスプロム剤、マンプロバミド剤、マンセブ剤、酸アミド系剤等による防除
	うどんこ病	平年: 並 前年: 並	平年: 並 前年: 並	・期間を通じて少なく推移した。		・DMI剤等による防除
	チャノキイロアザミウマ	平年: 並 前年: 並	平年: やや少 前年: 並	・発生は平年よりやや少なくて推移した。		・ネオニコチノイド系剤、合成ピレスロイド系剤、有機リン系剤等による防除
茶	炭疽病	平年: 並 前年: 並	平年: 並 前年: やや少	・発生は5～6月は平年よりやや多く推移し、7月以降は平年並で推移した。	・4月の多雨	・QoI剤等による防除
	チャノココカモンハマキ	平年: 並 前年: やや遅	平年: 並 前年: 並	・フェロモントラップ(東彼杵)の誘殺数は平年並で推移した。圃場での巻葉数も平年並で推移した。	・防除の徹底	・エマクテン安息香酸剤、有機リン系剤、IGR剤による防除
	チャノホソガ	平年: やや遅 前年: やや遅	平年: やや少 前年: 並	・フェロモントラップ(東彼杵町)の誘殺数は、平年並で推移した。圃場での巻葉数は平年よりやや少なくて推移した。	・防除の徹底	・チャノココカモンハマキとの同時防除
	チャノミドリヒメヨコバイ	平年: 並 前年: 並	平年: やや多 前年: やや多	・発生量は6月に多く、発生圃場率は期間を通じて平年よりやや多く推移した。	・5～6月の少雨	・ネオニコチノイド系剤等による防除
	チャノキイロアザミウマ	平年: 並 前年: 並	平年: 並 前年: 並	・発生量は、期間を通じてほぼ平年並で推移した。		・ネオニコチノイド系剤等による防除
	カンザワハダニ	平年: 並 前年: 並	平年: 並 前年: やや少	・発生は6月に多く、その他の期間はほぼ平年並で推移した。	・5～6月の少雨	・クロルフェナピル剤、ミルベクテン剤等による防除
	クワシロカイガラムシ	平年: 並 前年: やや遅	平年: 並 前年: 並	・発生は、4～5月及び7月が平年よりやや少なくて、その他の期間はほぼ平年並で推移した。	・4月及び7月の多雨	・有機リン系剤、IGR剤、ヒリプロキファン剤等による防除 ・防除情報による防除適期の提供